

いわむろのみらい

現代GP 「いわむろのみらい」創生プロジェクト



中間報告◇2

「自分たちのまちを自分たちの手で」星伸二さん◇6

岡崎昭さん◇7

渡辺誠志さん◇8

編集後記◇8

中間報告

10月31日、武蔵野美術大学のプロジェクトチームが地域を盛り上げていくための企画を持ち込み、住民の方々に前にプレゼンテーションを行った。温泉街を中心とした光の演出、道の景観、音の調査、地域の素材を活かしたグッズ、サイン計画、そして観光複合施設の運営計画などの提案がされ、地元住民を招いたイベントも開催した。

夜の散歩は提灯もって

今回光の環境デザイン計画チームは岩室のあかりをどのようにしていきたいかという考えを5つ打ち出し、提案した（左図を参照）。

自然の闇を大切にすると、そのためには全体的にオレンジ色のあかりを増やすなどといったほっと出来る道や場所を演出していく。

アイデアとしては、足湯を作りその温泉の周りをあかりで演出するもの、霊雁の湯をライトアップする案、温泉に向かうまでの道などを行灯で照らすというものだ。そして今行灯、提灯のデザインも考え、実際どのように見えるか高島屋前、霊雁の湯の前に設置し実験を行った。

今後はどの電球が

光源として適切か、LEDの保存・管理などについてなど具体的な方針をまとめていく。

まちにおく提灯のデザイン案



- ・「岩室は暖かいあかりでもてなします」
- ・「岩室は美しい闇と自然を大切にします」
- ・「岩室にはまぶしいあかりがありません」
- ・「岩室では光のアートに出会えます」
- ・「岩室は美味しいあかりを目指します」

サウンドデザインチーム

からころ鳴るは下駄の音

普段なかなか、気にとめない音というものを分析し、下駄というツールを利用して岩室に合った音を創り出していくことを提案した。

音というものはそもそも、その場の空気のような存在であり音が良くなれば街の雰囲気も良くなるのではないかという考えである。

案としては観光客向けにサウンドマップを作り、音を聞くために足を運んでもらうスポットを示し、そうした場所で下駄を履いてもらい懐かしい音を創り出すというものだ。また今後は、車の音の問題を解消しなくてはならないことを言及した。また

下駄を履き行灯を持って霊雁の湯へ



良い音を広めていくために下駄を旅館に置いてもらい、履いている人には特典がつくなどを考えている。岩室では下駄職人を訪ねて話を聞き、下駄からつくるうと計画している。



下駄と手作りの提灯を下げて、いざ街中へ。雨の中のイベントだったが、カラコ口と音を響かせ、夜の闇に淡い明かりが揺れて移ろう景色は幻想的。一方で課題も見えてきた。提灯が重いという意見や、下駄の音がたくさん重なれば自然にある良い音を消してしまうのでは、との声があったのだ。また観光客にとっては心地良い空間であったとしても、住民にとって必ずしも過ごしやすい生活空間になるとは限らない。住民と話し合いを重ねることが必要だろう。



酒器で一杯、浴衣姿の温泉巡り

旅館のアメニティーグッズ

というテーマを決め、陶

磁、木工、テキ

スタイルなど、

それぞれの得意

分野・専攻を活かし、多方

面からのアプローチを試みた地

場産品チーム。小物類を充実さ

せていくことで、旅館のイメー

ジを向上させることが狙いだ。

その中で特に会場を沸かせたの

は、浴衣、酒器、花器。

まず、浴衣は、岩室温泉は温

泉街であるのに、浴衣を着て

歩く観光客をあまり見かけない

という問題を解決しようとい

う考えで提案された。そこで

提示された浴衣

は、岩室を



イメージとする4種

類の異なった柄の生地を繋ぎ合

わせるという奇抜なもので、皆

を驚かせた。柄が混合している

こともあり多少派手な印象を受

けるが、そこには岩室を元気に

しようという想いが込められて

いる。また、外を歩いて欲し

いということから、サウンドス

ケープチームが製作中の下駄と

ファッション性などの面で連動

していけたら、といった今後

の展開についても言及が

あった。

次に、酒器の提案では、

陶器の中に空気の間を作るこ

とで、水に浮かべ

られるものを用い

う考えが示され

た。ぶかぶかと温泉

に浮かべられた酒器は、

温泉の雰囲気作りに一役買う



道の計画チーム

どんな風景にしたいですか？

ことになるだろう。現在、様々な理由から岩室にあるほとんどの温泉が温泉内での飲酒を禁止しているという事実はあるが、この提案をきっかけに、お酒を飲みながら浸る月見風呂が現実になる日も近いかもしれない。

最後に花器であるが、盛

り上がりを見せたのは

プレゼン終了後で

あった。質疑応

答にて旅館

関係の方



法を提案し、付

加価値については次

回までに機能、形状について再

考することを約束した。

から、花に必要なコストの話や、

花器としてだけでなく自然の加

湿機能を持つ等、付加価値の必

要性などを指南された。それに

対して学生側は、花のコストを

軽減するため、造花や一輪挿し

といった方

温泉街のメインストリートを

端から写真に収めたものを繋ぎ

合わせて景観を分類し、メイ

ストリートの現状を報告した。

メインストリートには旅館が軒

を並べる一方で、地元住民の

方々向けの商店も点在する。観

光客の行動空間と地域住民の生

活空間が混在していることを挙

げ、住民に意見を募った。

地域活性化のための場として

提案された街角広場。町の中に

一息つける憩いの場や、定期的

に物産販売をするところを設

ける案である。以前ストリート

ファニチュアチームが出した計

画とも通じる部分があり、物産

販売に関しては観光複合施設で

の展開と関係してくるので検討

が必要になるだろう。

矢川では景観やゴミの問題を

抱えているが、観光という面

でも住民の暮らしの中でも課題に

なってくる。最終的にどのよう

な報告・提案がされるか注目し

たい。

左上から

- ・着物を美しく見せる椅子
- ・新しい浴衣の柄
- ・なんだっけ？
- ・湯船に浮かぶ酒器



ワークショップ計画チーム

御神燈から始まる物語



5月に行われた「岩室甚句」に続き、ワークショップが行われた。今回は婦人会の方に加え、岩室中学校の生徒が参加し、年齢層の広い活気あるものとなった。今回作ったものは「御神燈」である。

これは祭礼のときに多数点灯する明かりで、地域によって形や模様の特徴がある。参加者は用意されたお菓子を片手に「祭」にまつわる思い出を語り合い、思い思いの切り絵を作った。

中学生は外の雨をもともしない明るい表情と挨拶で登場し、開始からものの数分で笑い声が聞こえた。会場の雰囲気は終止和やかだったが、これは学生たちのパフォーマンスや中学生の明るさに加え、婦人会の方々が率先してモノマネをしたり、生徒と一緒に三味線を弾いたり、場を和ませてくれたことが大きかったのではないだろうか。芸能人に詳しい方や、アニメの歌が歌える方などもあり、祭りの話はいろいろな方へ展開していた。

出来上がった御神燈の絵柄は、天狗や花火、神輿など多彩

で、同じ「祭」というテーマ

でもグループによ

って内容が少し

ずつ異なっていた

ことが伺えた。こう

して1人1枚ずつ書いた

絵を学生の作ってきた木

枠に貼り、1チーム1個、

計6個の御神燈が完成した。

参加者の感想は「楽しかった」

「またやりたい」というものが

大半で、年配の方は特に、話し

ているうちに昔のことを思い出

して懐かしい気持ちになったと

いう。一方で「何を描くか悩ん

だ」という声や「次は事前にテー

マを提示しておいてほしい」と

いう希望もあった。

ワークショップは住民と住民、岩室とムサビをダイレクトにつなぐ、村おこしの活力源である。1団体だけでなく、今回のように、婦人会と中学校というような年齢差のある参加を期待したい。



出来上がった御神燈

コアチーム

いつも旬をお届けします

コアグループはチーム内で観光複合施設担当とプロジェクトのマネージメント部門に分かれて活動をはじめた。観光

複合施設運営に向けては、新しく商品を提案するための調査経過や、施設内の内装案を発表。商品開発の調査では、各旅

よりなれ〇〇 パナーカラー展開案

2007.10.9 高麗

春						
	春色	落公英色	空色	桜色	紅梅色	萌黄
夏						
	藍草色	承和色	深緑	靑瑠色	朱色	紺色
秋						
	菫紅	苔色	京紫	落葉色	桔梗色	茄子紺
冬						
	瓶覗	紫色	鉄紺	生薑紺	松葉色	壺々餅

館のお土産コーナーなどを巡り、写真に収めて品目・種類・パッケージなどの情報収集をした。さらに1年を24節季に分け、それぞれの季節ごとに旬の産物をまとめた産物カレンダーを発表。カレンダーに連動してバナー（左図・施設内外に吊るす垂れ幕のようなもの）も24節季それぞれで展開していく、という提案だ。季節ごとにテーマカラーを設定し、旬の素材を描いてバナーとする。今後はそれぞれの季節に合う色を探し、その季節を象徴する素材集めをしていく。2週間という短い周期で変化させていくことで、常に新たな雰囲気と旬のものを提供できる場になり、何度訪れても飽きさせない。そしてどの季節に足を運んでも楽しめる岩室を目指した提案である。

サイン計画チーム

まちのシンボル決定間近！



Iwamuro Onsen

人の形からデザインしたマークは、複合施設で使おうという案も。



いわむろおんせん

岩室のシンボル第一候補！サイズを小さくしても認識できるものに改良中。



サインをおく予定地

訪問1日目と2日目、岩室地域のサインシステムの現状を知り、改善方法を探るため、地元住民を招いたアンケート調査会が行われた。標識と景観の調査報告として、現場の写真と改善案を視覚的に比較し、サインシステムの提案を行った。試作の標識は簡易的なピクトグラム（絵図）と方向を示す矢印、そして文字を入れたシンブルなもの。街中に置く標識のデザインを統一して、観光客が見つけやすく温泉街の雰囲気

崩さないものを目指していく。標識の高さはアイマークカメラ（人の視線を調べるカメラ）を使って記録したデータをもとに現在検討中である。また、マークはサイズを小さくしても認識できるものにするため、手を加えて微調整している。実現化に向け、アンケート集計や地元住民との意見交換などを繰り返し、地域住民の方々に広く長く親しみを持ってもらえる案を探っている最中だ。

星先生に伺いました！

自分たちのまちを 自分たちの手で

ほっ 岩室 保

「人を知り、岩室を知る。」

山あり、里あり、平野ありの岩室の風景はとても魅力的です。そして、自分がこの環境の中で美術教育ができるということ、とてもうれしく思っています。でも、その良さは一度外に出てみないと気付きにくいものですね。子どもたちにはこの岩室の良さを分かる人間になってもらいたいです。



星伸二さん／新潟市岩室中学校美術教諭。

魚沼出身だが、結婚を機に岩室近隣である新津に。

総合学習で

は、以前から子どもたちが地域について調べていたのですが、この度、岩室が新潟市に統合され政令指定都市になり、この先子どもたちの中で「自分たちの岩室を自分たちの手で」という感覚がどんどん薄れていってしまっているのではないかと思います。不安がありました。子どもたちには豊かな岩室のことをいつまでも想い続けて欲しい。新しく岩室の未来について考えていきたくて始めました。未来を考える上で、昔のことや今のことを調べる必要があります。調べていく過程では人と会う必要があります。そうやってものについて調べていくんだけれど、その向こうには必ず人がいて、関わりなくてはならない。その中で、岩室を昔から知るおじいちゃんやおばあちゃん、今岩室を支えている人たちの生き方と関わるのだと思います。そうすると、岩室のことを調べているようで、そこに生きている人の生き方について学ぶことになる。それは凄い大きなエネルギーになるのではないかなと、併せてそういうことも子どもたちには感じたり考えたりしてもらいたいですね。



「伝える」

私子どもたちに求めるのは、いかに意味のある実用的な提案ができるかということではなくて、一生懸命岩室のことを考える経験をして、自分なりに考えたことを人前で自信を持って発表するということです。かたはレポートでも試作品でもなんでもいいと思いますが、それぞれにあった方法で何か伝えることが大切です。発表会をしますので、相手がいますよね。一生懸命伝えなきゃいけませんし、耳を傾けなくてはならない。お互いが同じテーマでやっていて、それで発表しあうことで、まずは生徒同士で自分たちはこういうことを提案したけど、ああいうことを考える人たちがいるんだと、共感したり、気付かされたりする部分があったり。そういうことって自分の視野を広げることに繋がると思うので。

また、お話を聞かせていただいた方や今でも岩室について一生懸命考えている方、例えば、温泉関係の方とか、観光協会の方など、たくさんお世話になったので、そういった地域の方に案内を出して、発表会に来てくださーいといってみるのもいいかなと考えています。

「いわむろのみらい」

今、日本中、商業ベースといいますが、刺激の多い情報がいっぱい溢れていて賑やかになっていっていると思うんですよ。のどかな場所が減っていて、でも、本当はこういうところがないと思っている人がたくさんいるんですね。ですから、勝手な言い方かもしれないですが、今のまま人々を開放するような地域であってほしい。品のある街だと思っんですよ。そういうところを大事にしてほしいです。

そこで、子どもたちにはこういった活動を通して、自分の地域のことは自分たちで良くしようといった、ふるさとをいつでも思い起こせる大人、ふるさとを愛する人間になってもらいたい。そして、教師として子どもたちがそうなれる環境を整えていくこと、それが岩室の未来に対して私のできることだと思います。



新潟を元気づける

2004年に発生した新潟中越地震から3年迎えた今年10月に、「震災復興」「観光復興」等を祈念し、「観光復興狼煙（のろし）」上げプロジェクトが実施された。これは2007年に発生した中越沖地震の復興の願いも大きく、さらに意味が深まるものになった。

内容としては、新潟の各地方から狼煙をリレーし、震源地であった川口町を目指すというもの。参加した岡崎昭さんに、当日の様子を伺った。

「3団体参加して、そのうちの2団体が岩室地区でした。メンバーは史跡保存会や、多宝山を整備するメンバーなどで、みらい研究会として来ている人が半分くらいいます。当日は残念ながら天候があまり良くなって、霧がかかってしまいました。向こうの山の狼煙が見えなかったんです。でもきつと、昔だっってこういうことがあったんでしょうね。だから私達は、狼煙には情報伝達の意味の他

に、火を焚いて疲れた武士達を元気づけさせる目的もあったんじゃないかと思いました。」

今回は残念ながら初めてということもあり、岩室の人々の参加が少なかったという。しかし、「狼煙上げ」は参加地域の拡大や創意工夫により、手法が多様化すると同時に、里山や山城の景観保全や環境教育等の面から、新しい森林利用・集落活性化、都市

住民の健康文化・環境活動等、多岐にわたる波及効果が期待される。

また、2009年にはNHK大河ドラマ「天地人」の放送が決定し、その主人公「直江兼続」にまつわる上・中越をはじめとする新潟県全域が全国に注目されることとなり、本県観光を盛り上げていく絶好のチャンスにもなる。

「いろいろな目的もあり

ますが、まずはみんなで楽しむことからですね。楽しむことも忘れては面白くないから。今度はもっと、幅の広い年齢層に来てもらって、焼き芋を焼いたり消防団に協力を得て消防訓練したりしながら長く続けていきたいですね。」新潟を元気づける狼煙は来年も上がるそう、岡崎さんの声は希望に満ちあふれていた。



A portrait of a middle-aged man with short, dark hair, a mustache, and glasses. He is wearing a dark blue jacket over a plaid shirt. The background is slightly blurred, showing some greenery and a sign with the characters '五' and '口'.

お酒が
つなぐ
コミュニ
ケーシ
ョン

また純米酒吟醸の他に吟醸酒も造り、おかげ様で吟醸酒の方は2カ月であつという間に完売でした。来年、岩室美流が出来

岩室でとれた自信のある商品
品を売っていくことにより、
地域一帯で盛り上がりと思
います。

A group of people are walking at night, likely on a sidewalk. They are carrying umbrellas, suggesting it is raining or has recently rained. The scene is dimly lit, with some light reflecting off the wet surfaces and the umbrellas. The people are dressed in dark clothing, typical of nighttime wear. The background is dark, with some distant lights visible.

食べ物はもちろん、空気までも美味しい岩室へ待ちに待った視察。美味しいづくしのせいか、帰ったときには毎度体重が増えているという、楽しみなだけけど悩みも密かに抱えつつバスに揺られます。今回は「ほほほナイト」というイベントを引き連れて、意気揚々と乗り込んだ私たち。しかし予定していたイベントは雨に降られてしまい、「ほほほナイト」がトホホナイトに……と思わず言っ

しまうぐらい残念でした。けれども、雨に降られながらも歩き鳴らした下駄の音はカランコロンと街中を響きわたり、灯籠の光がまるで蛍の光のように儚く揺らめく姿を見て、これから岩室が目指していく姿がぼんやりとみえたような気がして、厳しい状況でしたが手応えを感じることが出来たのも事実です。目が覚めるとあつという間に東京で、夢見心地からすぐに現実に戻されて嫌になります。が、心なしか以前より心が軽く、岩室のために出来ることを考える私たちのほうが知らぬ間に癒されていて、岩室という存在の持つ優しさ、大きさを思い知らされるばかりです。しかし、だからこそこれからしっかり恩返ししていかなくては、と強く感じるのでした。

発行日 2007年12月16日
発行元 「いわむろのみらい」創生プロジェクト
メディアデザインチーム
編集長：西村奈都子
副編集長：濱祐斗
デザイナー：河内奈緒
ライター：伊藤聡里、志村享史

連絡先 〒187-8505
東京都小平市小川町 1-736
武蔵野美術大学 研究支援センター
Tel&Fax 042-342-7263
URL <http://www.musabi.ac.jp/iwamuro/>
©「いわむろのみらい」創生プロジェクト

現代GP「いわむろのみらい」創生プロジェクト